

サンデンフォレストにおける 生物多様性保全に向けた森林管理の実践

○ 吉井咲夢、落合清勝（サンデンファシリティ株式会社）

キーワード：生物多様性、森林管理

サンデンフォレスト・赤城事業所は、群馬県に本社を置くサンデンホールディングス株式会社（伊勢崎市・製造業）の事業所のひとつであり、群馬県前橋市の赤城山南麓に位置する（Fig. 1）。2002年に「環境と産業の矛盾なき共存」のコンセプトのもと建設され、工場の周囲を取り囲む形で社有林が広がっている。社有林は、造成前から現存している残置森林と、造成時に開発・植林した造成森林の2種に分けられる。

造成以降、樹木は成長し、里山林としての姿を具現化している一方、里山林が担う役割、また企業が自然環境および地域に果たしていく責任を再認識し、管理の方向性を見直していく時期に差し掛かっている。

サンデンフォレストでは、「生物多様性保全への取り組み」をより質の高いものにリフトアップするために、森林管理の方針を一から見直し中である。ここでは、現時点での管理方針のもと実践している、サンデンフォレストでの森林管理の一部を紹介する。



Fig. 1 サンデンフォレスト全景

① 生き物の動線を意識した植栽管理

サンデンフォレスト全体は、4段の敷地（宅盤）に分かれており、宅盤間には緑化された斜面が存在する。この斜面が、工場用地と森林地帯の境界を曖昧にする役割を果たしており、自然環境との共存をコンセプトに掲げたサンデンフォレストの特徴のひとつである。斜面には造成時に植樹を施している。

斜面は道路や駐車場といった人の往来が頻繁な箇所近接しているため、景観面お

よび安全面の観点から、下草刈りを徹底してきた。しかし、周囲を囲む社有林を行き来する小型および中型野生動物のけもの道としての役割を持たせるために、藪を設けるようにした。また、人に危害を加える可能性のある大型哺乳類が滞在するのを防ぐために、藪を点在させるような管理地を設けた。



Fig. 4 帯状に藪を残した管理地



Fig. 5 スポット状に藪を残した管理地

② 里山代表種の保護

サンデンフォレストには、オオムラサキやキンランといった、里山を代表する希少種が自生・生息している。これらの生物は、人間による一定の手入れにより維持される里山環境（雑木林など）に生息するため、サンデンフォレストの自然が里山環境を維持できていることを証明すると考えられる。

サンデンフォレストでは、2004年からオオムラサキを継続的に保護しており、管理計画の見直しと同時に、その成長に欠かせないエノキの保護および植樹も実施することとした。エノキはオオムラサキの幼虫の食樹であり、成虫はエノキの葉に卵を産む。サンデンフォレストのエノキは大木が多く、オオムラサキ生息には適さないため、実生の育成が不可欠である。



Fig. 4 産み付けられた卵

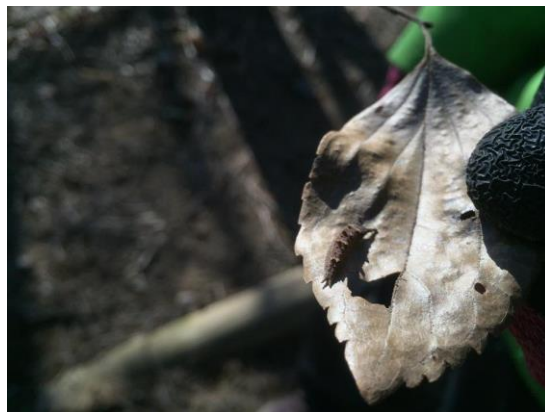


Fig. 5 越冬幼虫